Eco-Philosophy
Vol.3

TIEPh
Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

東洋大学「エコ・フィロソフィ」研究
第 3 号

Contents

『「エコ・フィロソフィ」研究』第 3 号の刊行に寄せて　竹村牧男　・・・・・・　1
TIEPh 活動組織
2008 年度活動報告

Ⅰ　—TIEPh 第 1 ユニット　自然観探究ユニット—

仏教の環境観について　竹村牧男　・・・・・・　13
自然に対する義務と人間中心主義　—カント哲学の人間観を手がかりに—
田中綾乃　・・・・・・　27

Ⅱ　—TIEPh 第 2 ユニット　価値意識調査ユニット—

ベトナムの環境問題とコミュニティ意識　大島尚　・・・・・・　39
環境配慮行動を促すメッセージの制御焦点と受け手の
感情状態との対応性が説得効果に及ぼす影響
北村英哉　・・・・・・　67

Ⅲ　—TIEPh 第 3 ユニット　環境デザインユニット—

『葬書』の思想と環境論　山田利明　・・・・・・　79
認知運動療法という技法——システム存在論　河本英夫　・・・・・・　93
メメント・イマジカ　身体の記憶へ　河本英夫　・・・・・・　109
環境哲学の可能性と現実（Ⅰ）　山口一郎　・・・・・・　119
環境デザインのプログラム設定
—環境内存在の現象学的アプローチへ向けて(2)—
稲垣諭　・・・・・・　131
より充実したリハビリテーションに向けて
—第一回「人間再生研究会」総論—　稲垣諭　・・・・・・　147
脳性麻痺のリハビリテーション—身体の復権のために—
人見眞理　・・・・・・　151
右半球損傷症例の臨床展開を通して
—右中大脳動脈領域の脳梗塞症例における病態解釈の一検討—
森俊明　・・・・・・　165

Ⅳ　Summary　・・・・・・　177

TIEPh 活動組織

Tomonori MATSUO	President, Executive Director	松尾　友矩　　機構長
Makio TAKEMURA	Professor,　Nature Unit Project Representative	竹村　牧男　代表 自然観探求ユニット
Takashi OHSHIMA	Professor,　Values Unit	大島　　尚　　価値意識調査ユニット
Hideo KAWAMOTO	Professor, Environment Design Unit	河本　英夫　環境デザインユニット
Taigen HASHIMOTO	Professor, Nature Unit	橋本　泰元　　自然観探求ユニット
Hisayoshi MIYAMOTO	Professor, Nature Unit	宮本　久義　　自然観探求ユニット
Kohei YOSHIDA	Professor, Nature Unit	吉田　公平　　自然観探求ユニット
Shogo WATANABE	Professor, Nature Unit	渡辺　章悟　　自然観探求ユニット
Satoshi SHOUJIGUCHI	Associate Professor, Nature Unit	小路口　聡　　自然観探求ユニット
Kiyoshi ANDO	Professor, Values Unit	安藤　清志　価値意識調査ユニット
Yoshiaki IMAI	Professor, Values Unit	今井　芳昭　価値意識調査ユニット
Hideya KITAMURA	Professor, Values Unit	北村　英哉　価値意識調査ユニット
Naoya SEKIYA	Lectuere, Values Unit	関谷　直也　　価値意識調査ユニット
Toshiaki YAMADA	Professor, Environment Design Unit	山田　利明　　環境デザインユニット
Katsuzo MURAKAMI	Professor, Environment Design Unit	村上　勝三　　環境デザインユニット
Ichiro YAMAGUCHI	Professor, Environment Design Unit	山口　一郎　　環境デザインユニット
Shin NAGAI	Associate Professor, Environment Design Unit	永井　　晋　　環境デザインユニット
Satoshi　INAGAKI	Assistant Professor, Environment Design Unit	稲垣　　諭　　環境デザインユニット
Ayano TANAKA	Research Associate	田中　綾乃　　研究助手

TIEPh 2008 度年活動報告

平成 18 年 6 月より、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy, Toyo University＝略称 TIEPh）を開設し、「エコ・フィロソフィ」構築のための戦略拠点として活動している。

今年度は、昨年度に引き続き、各ユニットの研究を進めるとともに、これまでの研究成果をシンポジウムやセミナーを通して公開した。

5 月は、第 3 ユニットを中心に日本病跡学会と共催で「創造性と経験の変容」というテーマで学会を開催し、2 日間に渡り盛んな研究発表を行った。7 月には、同じく第 3 ユニットが昨年に引き続き認知運動療法研究会と共催で学術集会を開催し、障害者にとっての環境経験を探求し、環境デザインの考察を深めた。

11 月には、3 年間継続して行っている TIEPh と茨城大学 ICAS 共催の国際セミナーを開催し、東洋思想と西洋思想の両観点から「エコ・フィロソフィ」のあり方について多角的な考察を行った。同じく 11 月には、第 2 ユニットを中心に、国際シンポジウム「みんなで地球を救いたい！－環境 NGO のサステイナブル・マインドー」を開催。アメリカ、中国、日本において環境 NGO に関わっている方々をパネリストとして迎え、持続可能な環境社会の構築に向けて、グローバルな視点で実践的な議論を行った。さらに 12 月には、IR3S との共催で哲学セミナー「サステイナビリティ学における哲学の役割」を開催。IR3S 傘下の哲学研究者に声をかけ、サステイナビリティ学における哲学の可能性を参加者とともに討議できたことは有意義なことであった。なお、人間再生研究会との共催セミナーでは、リハビリテーションの可能性について議論を行い、その成果は本年報にも収めた。

学内においては、9 月に TIEPh 全体のワークショップを開催し、各ユニットの研究員が「環境（Umwelt)」をテーマに発表を行った。また、第 3 ユニットが中心になって、10 月以降、環境デザインを巡る身体論ワークショップも継続的に開催されている。

なお、昨年度から本学の学部学生を対象として始まった「エコ・フィロソフィ入門」の講義は、今年度も本イニシアティブの研究者を中心に全学総合科目として開講した。さらに今年度は第 3 ユニットの研究員がドイツ、フランスにおいて「環境哲学」につ

いての調査を行い、欧州の環境思想の哲学者にインタビューを行った。ドイツの哲学者インタビューについては、『別冊』に掲載した。第 2 ユニットの価値意識調査は、今年度はベトナムで研究調査を行い、その分析結果は、本年報に掲載した。

その他、HP における研究成果の公開、年に 2 回の Newsletter の発行、小冊子『サステナ』への研究員の寄稿、研究年報の発行等を通して、TIEPh の研究成果の発表と「エコ・フィロソフィ」の啓発を目指してきた。

＜活動報告詳細＞

TIEPh 所属研究員は下線を表記

4 月～7 月

東洋大学の「全学総合授業」として、「エコ・フィロソフィ入門」を開講

『サステナ』7 号刊行

連載エッセイ　「文化の伝承をめぐって」　竹村牧男

5 月

・8 日

TIEPh 主催、2008 年度セミナー

テーマ　:「資源利用の人類学」

講師　:長谷川眞理子

場所　:東洋大学白山キャンパス 5201 教室

・23 日～24 日

日本病跡学会、TIEPh 共催、第 55 回日本病跡学会総会

テーマ　:「創造性と経験の変容」

総会会長　:河本英夫

発表者　:加藤敏、荒川修作、花村誠一内海健、十川幸司、佐藤康邦、村上勝三

場所　:東洋大学

7 月

ニュースレターNo.6 発行

巻頭「欲望のコントロール」　住明正

「”MOTTAINAI”から”SHINOBINAI”へ」　小路口聡

「環境配慮行動を促すための社会心理学的アプローチ」今井芳昭

「環境概念の前史」　稲垣諭

・5 日～6 日

日本認知運動療法研究会、TIEPh 共催

第 9 回日本認知運動療法研究会学術集会

テーマ　:「心の可塑性—ロマンティックサイエンスの世界—」

講演者　:池田由美、高畑圭輔、宮本省三、河本英夫、中里瑠美子、人見眞理、鶴埜益巳

場所　:東洋大学井上円了ホール

8 月

『サステナ』8 号刊行

連載エッセイ　「食べることと生きること」　竹村牧男

・5 日～22 日

第 3 ユニット、「「環境哲学」についての調査」を実施

実施者　:山口一郎、稲垣諭

場所　:ドイツ、イタリア

9 月

・24 日

TIEPh　ワークショップ

テーマ：“Umwelt”を巡って

発表者：竹村牧男、関谷直也、稲垣諭

場所　:東洋大学白山キャンパス第 1 会議室

10 月

『サステナ』9 号刊行

連載エッセイ　「閑へのあこがれ」　　竹村牧男

・15 日

東洋大学哲学科、TIEPh 共催の身体論ワークショップ

テーマ　:「動作療法について」

講師　　:緒方登士雄

場所　　:東洋大学白山キャンパス 5307 教室

11 月

・8 日

茨城大学 ICAS、東洋大学 TIEPh 共催の国際セミナーを開催

テーマ　:「持続可能な発展と自然・人間――西洋と東洋の対話から新しい
エコ・フィロソフィを求めて」

パネリスト:竹村牧男、小坂国継、ケネス田中、ジェフリー・クラーク、
中川光弘、岡野守也

場所　　:茨城県県南生涯学習センター多目的ホール

・15 日

東洋大学哲学科、TIEPh 共催の身体論ワークショップを開催

テーマ　:「カオス・デザイン」

講師　　:木本圭子

場所　　:東洋大学白山キャンパス 5307 教室

・22 日

TIEPh 主催の国際シンポジウムを開催

テーマ　:「みんなで地球を救いたい！」

コーディネーター:大島尚

パネリスト:メアリー・ミツォス、デボラ・セリグソン、前田洋枝、
今井芳昭

場所　　:東洋大学スカイホール

12 月～1 月

・第 2 ユニット「サステイナビリティに関する価値についての意識調査」実施

実施者　：大島尚

場所　：ベトナム

12 月

・6 日

IR3S、TIEPh 共催、2008 年度哲学セミナー

テーマ　：「サステイナビリティ学における哲学の役割」

基調講演者：木村競、蔵田伸雄

パネリスト：竹村牧男、山田利明

総合司会　：田中綾乃

場所　：東洋大学白山キャンパス 6209 教室

・13 日

人間再生研究会、TIEPh 共催、第 1 回セミナー

テーマ　：「より充実したリハビリテーションに向けて」

発表者　：河本英夫、森俊明、人見眞理、稲垣諭、中里瑠美子

場所　：東洋大学白山キャンパス第 2 会議室

・17 日

東洋大学哲学科、TIEPh 共催の身体論ワークショップを開催

テーマ　:「人工生命」

講師　：池上高志

場所　：東洋大学白山キャンパス 5307 教室

1 月

『サステナ』10 号

連載エッセイ　「月に心を澄ませる」　竹村牧男

ニュースレターNo.7 発行

巻頭「TIEPh 最終年度の活動に向けて」　竹村牧男

第 1 ユニット「哲学セミナー報告」　田中綾乃

第 2 ユニット「国際シンポジウム報告」　大島尚

第 3 ユニット「ドイツでの哲学者インタビュー報告」山口一郎

3 月

・2 日

評価委員会開催

・4 日～18 日

第 3 ユニット、「ヨーロッパの「環境哲学」についての調査」を実施

実施者　：永井晋

場所　：フランス

・23 日～24 日

IR3S 国内ワークショップで TIEPh の活動成果報告を行う

発表者　：山田利明

参加者　：田中綾乃

場所　：東京大学

・30 日

京都大学(KSI)学内ワークショップにて研究発表を行う

発表者　：大島尚

参加者　：今井芳明、田中綾乃

場所　：京都大学

I　　—TIEPh 第 1 ユニット　自然観探求ユニット—

近代の科学は、精神と肉体を分離して、肉体を心臓を中心とする熱機関と理解することから始まった。この心身二元論によって、故障した部分はそこを分解し、あるいは部品を取替え、場合によっては取り去ることで機関全体の保全を図る技術が発達した。部品には精神が存在しないと考えたから、これが可能になったのである。

確かにこの心身二元論は、科学技術の発展に偉大な寄与をしてきた。しかし、それと同時に科学というもののあり方を、きわめて限定的な理解の下におくことになった。実証されないものを、存在しないものとして見ることである。ところが、この社会や自然界の中には、数値や理論で実証し得ない感覚上の存在や出来事がいくつもある。例えば、漢方薬や民間薬と称される一種の経験的医療にもとづいた薬物がある。つい一昔前まで、これらの多くは薬物の指定さえ受けられず、食品として扱われた。その成分の分析や薬効の数値が提示できなかったからである。鍼灸に至っては非科学的の一語で斥けられた。ところが、こうした経験的科学にもとづく技術や方法には、数千年にわたって蓄積された洗練されたシステムが存在する。

東洋の思想は、基本的には心身一如の立場に立つ。精神と肉体は一体化したもので、精神のあり方が肉体に反映する。実は、その精神は肉体だけではなく大自然にも感応する。精神のあり方が自然界にも及ぶというのである。ここまでくると何やら胡散臭い思いを抱く人もあろうが、利便性と豊かさを求めた人間の精神が、過剰な開発と修復困難な破壊を引き起こした事実をみれば、わかり易い。

このユニットでは、西洋的価値観や科学技術が残した負の遺産に対して、東洋的な知の伝統がどのように関われるのかを検証し、そこから新しい発想と価値観の創造を図りたいと考えている。

Ⅱ　—TIEPh 第 2 ユニット　価値意識調査ユニット—

人間の行動が環境の変化を引き起こし、その変化が人間自身の生存を脅かしているというのが現在の環境問題の一側面である。地球規模で生じている環境の悪化は人間の行動に起因しており、行動の背後にはそれを制御する心理過程が存在し、一方で環境問題を認識する心理過程も存在していることから、この問題の解決のためには心理学的な立場からの検討が重要であると考えられる。しかし、これまで心理学で環境の問題を取り上げる際には、周囲の環境が人間の行動にどのような影響を及ぼすかといった枠組みが中心で、自然環境のような大規模な環境の側面や、行動が環境に影響を与えるというような問題が取り上げられることは少なかった。実際、「環境心理学」の分野においても、どちらかといえば人工的な環境が行動や意識に及ぼす影響を調べるといった応用的な側面を中心に研究が行われてきた。したがって、「エコ・フィロソフィ」の構築と展開を目指す本研究イニシアティブにおいては、従来の心理学の研究方法や成果を踏まえつつも、新たな視点を導入した研究分野の確立が必要となっている。

そこで、われわれの研究ユニットでは、まず環境に対する人間の価値観の側面からこの問題を検討することにした。心理学的な立場から環境問題にかかわる行動を検討するには、その行動の背後にある個人の態度を明らかにする必要がある。態度は、個人ごとに比較的安定した傾向であるが、社会的な環境により変化する可能性を持っていることから、人々が環境問題の改善に向けた態度を形成し、行動するようになることが問題解決の手がかりになると考えられる。しかし、態度変化をもたらす要因は単純ではなく、個人ごとの価値観に依存する面が大きい。価値観は、個人の経験だけでなく、文化や民族、国家、宗教、世代、性別などによっても規定され、一般に多様性を前提として議論されることが多い。おそらく、環境に対する価値観も多様であり、むしろさまざまな価値観の存在自体が現代の環境問題を引き起こしてきたという側面もあると思われる。そこで、まずは多様な価値観の内容を理解することから始める必要がある。

Ⅲ　—TIEPh 第 3 ユニット　環境デザインユニット—

現実の世界は、つねに動き続けている。また世界は、多並行分散的な多くのシステムの複合体としてある。システムの本性上、それぞれのシステムは、固有の動きの原理をもっており、部分—全体関係で全体に統制されることはなく、また他のシステムによって動きを決定されることもない。だが各システムは、密接に連動している。こうした場合、各システムは、直接原因で影響しあうことはなく、間接原因で密接に連動している。しかしこう述べたとき、間接原因にはどれほど多くの作用モードと作動パターンがあるかをつねに念頭に置く必要がある。

考えやすい事例で、図解的に示してみる。変動相場の金融世界には、いくつかの拠点となる場所に為替市場が置かれている。ニューヨーク、東京、フランクフルト、ロンドンが拠点となる為替市場である。それぞれのシステムは、そのなかで売買を繰り返している。システムの動きは、それぞれのシステム内の売買によってしか作り出せない。また売買が停止すれば、市場そのものが消滅する。だがシステムの動きは、ただちに他のシステムの売買動向に影響する。これは直接影響ではないので、ニューヨークで円がドルに対して下がっても、東京で逆に上がることもある。また為替市場以外の全般的な経済指標も間接原因となる。たとえばエタノール燃料が安価に製造できるというニュースが流れただけで、為替は変動する。また変動相場のネットワークのなかに入っていない中国の経済成長率の数字が変わるだけで、間接影響がでる。こうした人工のシステムには、仲買人がいて、それぞれが自分の利益を出そうとすると、結局のところシステム総体が安定するようにできている。

環境問題を考えるさい、人間の人工的なシステムに、自然の側のシステムを合わせて考えるようなシステム・モデルを設定しておく必要がある。このとき仲買人の役割は、なにが担っているのかを考えておく必要がある。仲買人の最大の働きは、選択肢を作り出すことであり、自分の利益しか考えないことである。そのことによってシステム全体の持続可能な発展が見込めるのであれば、このシステムはそのまま放置してよい。だが持続可能性が見込めないとき、システムの動きに選択的制御が必要になる。それはシステムの付帯的な付則とでも呼ぶべきものであって、システムの作動の継続と整合的でなければならない。そこにシステム・デザインの構想が出現する。

Ⅳ Summary

The Viewpoint on the Environment in Buddhism

TAKEMURA Makio

According to Buddhism, our universe is comprised of ten realms of living beings, ranging from the hells to the world of the Buddhas. By engaging in ascetic training, we create the conditions to be reborn in a higher realm upon our death. There is no separation between the various realms and the beings that reside in them. Hell beings live in hell, gods live in the god realms and the Buddhas reside in the Buddha realms. Since each individual being is always tied to its environment, its relationship with its environment is one of interdependence.

A fundamental view of Buddhism is that because the world of humans is Saha Wolrd (World of Endurance), that is to say, an impure land, we should strive to move to a higher realm instead of attempting to change our world. A clear example of this is the wish to be born in the Pure Land of the Amitabha Buddha. However, Buddhism also has another basic approach to this issue: since the realm where you reside is in fact only in your mind, if you purify your mind, then your world will be purified as well. Still, even if some individuals are able to purify their minds and change their surroundings for the better, for those unable to purify their minds the environment remains the same. As mentioned above, Buddhism rarely refers the concept of improving the environment in which we live.

On the other hand, according to the teachings of the Tendai School, the Kegon School, esoteric Buddhism and so on, this world that we live in is inherently a Pure Land of the Buddhas. If everyone understands this concept and strives to transform this world into a Buddha Land, then change is possible. Another basic tenet of Buddhism is depending-origination, which means that everything is mutually linked : not only are we linked with our environment, we are also linked with each other in a bond of interdependence.

Taking this perspective, we can extrapolate the following ideas, which may help point the way to some solutions on sustainability issues:

1) We can change our thinking about ourselves and our environment if we understand the link of interdependence between the two. This helps us to take a healthier stance on the natural environment.
2) If we accept that our environment has been already a Buddha Land, respect for the natural

environment comes easily.

3) By understanding that purifying the mind is one means of bettering our environment, we are able to clarify and develop our approach to environmental ethics and adapt our lifestyle accordingly.
4) In realizing that self and other are interdependent, we can deepen our understanding of intergenerational ethics.

There is another issue to consider: as people living in modern society, how can we apply Buddhist training to develop an appropriate lifestyle? We will explore this question at a later time.

Man's Duty for Nature and Anthropocentrism—An Approach through Kant's View of Man in His Philosophy

TANAKA Ayano

Environmental ethics emerging after the 1970s can be divided into two principal schools. One is the view that nature should be conserved for humans, in other words, the anthropocentric approach. The other view attributes value to nature itself, and taking a non-anthropocentric approach, focuses on wilderness and diversity of biosphere and aims to preserve nature. In other words, it rues the anthropocentrism that led humans in modern times to view nature as instrumental value to exert control over it and precipitated today's serious environmental problems. Much of environmental thought today is generally based on non-anthropocentrism and ecocentrism.

The philosophy of Immanuel Kant in 18th-century is usually held up as a representative example of anthropocentrism and is criticized for this. This paper posits a new understanding of anthropocentrism at the most original level, taking approach through Kant's philosophy. The aim of this paper is to express the view that today's environmental ethics, which appears to clash with anthropocentrism, can in fact coexist with anthropocentric thinking.

Environmental Issues and a Sense of Community in Vietnam

OHSHIMA Takashi

A survey on environmental consciousness, which consists of the same questions as Ohshima (2007) did in Singapore and Ohshima (2008) did in China and Japan, was conducted in Vietnam. The results show that people in Vietnam think more seriously about the importance of environmental preservation and the effects of environmental pollution on their health than the people in other countries. The results also highlight a strong sense of community possessed by Vietnamese people. They generally form a close relationship with their neighbors and plan to live in the same area for the rest of their life, though many of them think that the state of the natural environment in their community is not good. The answer to the question "Which of the following statements is closest to your views? Individuals should work hard to protect the global environment even if our life becomes inconvenient, or we should make our life more convenient" is found to be a key factor in eliciting proenvironmental behaviors, as was found in the previous study (Ohshima, 2008).

The Effect of Correspondence of Affective States of Recipients with Regulatory Focus of Message that Facilitates Environment-Conscious Behavior

KITAMURA Hideya

To examine the effect of persuasive message on environmental issues, an empirical experiment was executed. Higgins' theory of regulatory focus describes the facilitative focus as leading one to approaching behavior, making one to pay attention to positive events. While inhabitation focus leads one to avoidance behavior, making one to attend negative events. Each type of message was presented to ninety participants of positive, negative, or neutral mood state, and they rated their attitudes toward the environmental issues. Facilitation focus would match the positive mood state, and inhibition focus would match the negative mood state. So the message will have stronger effect when a message type corresponds the mood state. The results showed that an interaction effect of regulatory focus and mood states. In a negative and a neutral mood state, participants accepted the message of inhibition type more than of facilitation type. In a positive mood, participants accepted the both message types. The hypothesis was almost supported. Effective message types in daily life are discussed.

The Philosophy of *The Book of Burial* and Environmental Theory

YAMADA Toshiaki

The Book of Burial is said to have been written by Guo Pu during the Jin dynasty (265–420). However, this is not known for certain, and the work may date from a later era. It discusses the flow of *qi* and the action of water, giving detailed information about selecting a burial ground based on these elements and touching in particular on choosing a final resting place according to the scenery. This was the method of selecting sites in use prior to site selection made according to the *luopan* compass, which came into use after the Song dynasty (960–1279). In that sense, this work discusses the old theory of choosing suitable locations.

This paper attempts to clarify the theory and practice outlined in *The Book of Burial Ground* by translating and making available the abstract of the work in order to understand early Fengshui. It also addresses the issues of the differences between this Fengshui and modern Fengshui, the reason why choosing a burial site came to include selection of residential land and so on.

System Ontology—The Methods of Cognitive Therapeutic Exercise

KAWAMOTO Hideo

Cognitive therapeutic exercise is one physical therapy technique. It is a treatment method that involves organizing or reorganizing the body, motion or the relationship with the world through exercise appropriate to the environment. Generally speaking, after the second growth the secondary sex characteristics rehabilitation is essential for anyone trying to bring out more latent capacity. It means “better living,” even for non-handicapped individuals after a certain age. Rehabilitation carried out with the maximum involvement of cognitive functions is called cognitive therapeutic exercise. However, the ways that the body, motion or relationship with the world is organized are different for each. In particular, the relationship between motion and cognition is very difficult. Motion is not made by cognition and most motion is carried out at the subconscious level.

Möglichkeit und Wirklichkeit der Eco-Philosophie

YAMAGUCHI Ichiro

In diesem Artikel wird das Thema: Möglichkeit und Wirklichkeit der Eco-Philosophie“ behandelt. Das Diskussionsmaterial bezieht sich auf das Interview mit Peter Janich in Deutschland im Sommer 2008. Der Inhalt des Interviews bestehet aus folgenden Fragen:" 1) Was verstehen Sie unter dem Begriff der Umwelt? a. Ein Aspekt: Die Umwelt im Zwiespalt zwischen der real-kausal verstandenen und beherrschbaren Natur und der der durch verschiedene Grundhaltungen geprägten Kultur. b. Halten Sie es für sinnvoll, einen Forschungsbereich "Interkulturelle Philosophie der Umwelt"zu eröffnen? Wenn ja, unter welchen Fragestellungen? 2) Zum Begriff der "Umweltethik"a. Was für eine Ethik oder ethische Fragestellung ist in der heutigen globalisierten Umwelt möglich? b. Welche Einflüsse kann die Philosophie auf die Lösung aktueller Fragen, z.B. der Erderwärmung direkt oder indirekt geben?" Seine These beinhaltet, dass allein die Philosophie die Rolle des Vermittlers zwischen der verschiedenen Einzelwissenschaften durch die Erkenntniskritik und die Wissenschaftstheorie spielen kann, und dass die Unterscheidung zwischen der Kultur und der Natur durch die Überwindung des verengten Naturalismus mit der Reduzierung auf die realen Kausalität der Natur aufrecht gehalten werden soll. Hinsichtlich seines Standpunktes des Menschen-Zentralismus bei seiner Bestimmung des Begriffs der Umwelt wird die andere Möglichkeit der Philosophie der Lebenswelt hingewiesen.

Establishing an Environmental Design Program—Toward a Phenomenological Approach to Being-in-the-environment (2)

INAGAKI Satoshi

The framework of human behavior is as diverse as there are individuals. This diversity includes various modes of behavior—behavior by individuals or groups reached through agreement; unconsciously formed behavior; or forced behavior initiated through external restrictions. For example, it is not so easy to initiate environment-friendly behavior out of the human behavior framework formed by geographical, social or cultural environments. It is a commonly accepted notion that knowledge acquisition does not necessarily change behavior. Providing knowledge and theory, this paper presents environmental designs where such knowledge systems are experienced as practical and effective, or designs expanding experiences with the environment through body experiences, and outlines a research program for identifying many of the issues in this field. As a

case study for this approach, I draw upon architectural projects by Friedensreich Hundertwasser, the Viennese artist and architect.

Rehabilitation for Cerebral Palsy—For Remaking the Body Systems-

HITOMI Mari

The process in which the body is reinstated is equivalent to that in which the body systems regenerate. The purpose of the rehabilitation for cerebral palsy is to keep patients staying in the process by trying to bring “difference” (the difference of itself from itself own) in their body systems. It doesn’t mean that we try to force the systems to face to the unstable and disable situation, nor that we try to handle their bodies outside of their own experiences. We just try to set opportunities for them to begin to live with their own bodies.

In practice, the rehabilitation for cerebral palsy is still under the hypothetical theories, and our clinical exercises are carried out with a large number of trials and errors. Therefore, at the present, those exercises need to presuppose to conceive the pathological mechanism in the systems themselves which seem to intend to keep their unchangeable state. Each clinical exercise could be a daring attempt in which patients would remake themselves by facing to “difference” of the world.

Children with handicap like cerebral palsy seem to be exposed to invasive noise from their inner or outer world, which let them lose their contexts about their own bodies. It is very natural for their systems to manage to sustain themselves by depending only on simple network for moving and understanding, eliminating to be brought the cause of confusion like “difference”.

But as long as they come to meet their therapists, as long as they face to the world, and as long as their systems have opportunities to face to “difference“ in the world, many of them learn to keep standing in the relationship in which “difference” are generated, accept more “difference” in it, and take a new turn to the direction which they voluntarily adopt “difference “ through their own bodies. You might see their will slightly at the beginning of their trifling movements, or you might see they try to regulate their behavior according to the outer world. The body systems surely regenerate.

On the other hand, the pathological mechanism in their systems also seems to develop with their regeneration. Sometimes the present systems seem to regenerate, sometimes not, sometimes even to be reinforced. Their systems develop with their pathological mechanism as it is. It could be said that the possibility for body systems to regenerate should be the one for their pathological mechanism to change.

The detail will be introduced in the case reports.

An Examination of Morbid State Interpretation in Examples of Brain Infarction in the Right Middle Cerebral Artery Territory, through Clinical Deployment of Cases of Right Brain Damage

MORI Toshiaki

This paper reports on the case of a patient with several infarct areas in the right middle cerebral artery territory. This patient presented left hemispatial neglect, attention disorder, and motor and sensory paralysis on the left side. In the course of treatment, I compared the patient's condition while in a passive physical state such as eating, and in an active physical state such as walking. This revealed that the patient could handle passive situations to some extent but he could not walk, so he clearly had difficulty with active situations. When asked to evaluate his physical functions himself, the patient had difficulty describing the left side of his body, and could neither direct his attention to nor feel anything on the left side. I inferred that the patient could not handle active states because of his reduced capacity to feel his own body. As part of his treatment, I assigned the patient these tasks and had him carry them out: feeling the movements of his body, practicing his body position sense, feeling his body's position from the side of the body that was touching something and feeling which direction his head and body were facing when his body was in little contact with any surface. Although results were not outstanding, the patient became able to feel changes in movement on the left side of his body in active states and walk under supervision. Additionally, he became able to describe, to some extent, his current active state. I believe that thinking about how the patient himself felt and how he judged his condition based on that input is important from a treatment perspective.

「エコ・フィロソフィ」研究
Eco-Philosophy Vol. 3

平成 21 年 3 月 30 日発行
編集　東洋大学「エコ･フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）事務局
住所：東京都文京区白山 5 丁目 28－20
6 号館 4F 60458 室
℡：03－3945－7534
Email：ml.tieph-office@ml.toyonet.toyo.ac.jp
Homepage：http://tieph.toyo.ac.jp/